にちぎんのある街から

長崎

――外国文化になじんできた街

長崎という街には、いくつもの形容詞がついている。坂の街、異国情緒漂う街、貿易の街。地形も歴史も独自性がある街なのだ。早くから貿易港として開けた長崎には、さまざまな文化が入ってきた。町の人々は「自分たちとは異なる」それらの文化を受け入れてきた。その歴史を継ぎ、今も街の人々は他文化への寛容さを保ち続けている。

取材・文　木内　昇　写真　谷山　實

長崎市指定重要文化財の洋風住宅を三棟は長崎市古写真資料館に。江戸末期からの長崎の写真が展示されている。

幕末の頃、幕府の施設「長崎海軍伝習所」の教官として来日したオランダ人・カッティンディーケは、その日記にこう記している。

「誰でも海旅の後には、ちょっとした事にも感嘆し易いものであるが、そうした気持ち以外に、実際長崎入港の際、眼前に展開する景色ほど美しいものは、またとこの世界にあるまいと断言しても、あながち過褒ではあるまい」

長崎港をぐるりと山々が囲んでいる地形、斜面を利用して建てられた家々、その間を縫うように石畳の道が走る。長崎が、「坂の街」と言われる由縁である。道は埋め立て地をのぞき、寛文三（一六六三）年の大火の後に復興されたままの姿を今に留めている。長崎は、戦国の昔より南蛮貿易の拠点だった。江戸時代の鎖国令下においても出島・唐人屋敷を通し交易が行われ続けた。横浜や神戸よりも、異国と交わってきた歴史が長い。そのせいか、反り屋根の唐寺院や白亜の洋館といった建築物が、独特な地形の景観の中に、違和感なくなじんでいる。

昭和三十二年、旧グラバー邸を所持者の長崎造船所が市に寄贈して以来、長崎市は数多くの歴史的建造物の保存にも力を入れてきた。市民の意識も高い。昭和六十三年に、南山手の香港上海銀行取り壊しの話が持ち上がるも、熱心な保存運動により中止となった。この一件をきっかけに、「保存地区保存条例」が公布され、東山手町、南山手町を重要伝統的建造物保護地区として国から選定されることとなった。

その東山手町、かつては外国人住宅だったという瀟洒（しょうしゃ）な洋館群の中に、ひときわ目立つ一棟がある。さまざまな国旗が軒先にはためき、入り口には「地球館」の文字。「建物が空いていたので、何かに利用できないか、と市からお話があって」と語る牛嶋洋一郎さんは、地球館を拠点とする「国際交流塾」の塾長だ。その名の通り外国人との交流をテーマに活動を行っている塾だが、館内の雰囲気はいたってフランク。日本人と外国人が一緒に厨房に立ち、英会話の先生と生徒がそろって食事をとる。お互いかしこまりつつ距離を縮めようと努める図ではなく、ただ国籍を問わず付き合いがなされているような心安さがある。地球館では主に、「ワールドフーズ・レストラン」と、英語や中国語といった語学教室が開かれている。レストランのシェフは、一五～二〇名の外国人

明治26年清国政府と在日華僑によって建立された孔子廟は、極彩色の瑠璃（るり）瓦が目を引く（右）。オランダ坂の下にある野口彌太郎記念美術館は、かつて長崎英国領事館として使われていた。重要文化財に指定されている（下）。

水深のある長崎港は船をつけるのに適していた。

地球館は東山手洋風建築群の一棟にある。造りは洋風だが桟瓦葺きに鬼瓦というのは日本ならでは（上）。マントルピースの煙突もすべての棟に（中）。中国風の欄間と擬宝珠が軒下の部分にしつらわれる。さまざまな国のテイストが混じり合う（下）。

長崎国際交流塾を主宰する牛嶋洋一郎さん。塾での活動のほかに大学で講義を行うなど多忙な日々。バドミントンとチェスには特に力を入れる（上）。

以前は長崎港が一望のもとに見られたという高台に建つ洋館が地球館だ。掲げる国旗はその日の料理によって変わる。

が日替わりで勤めている。自国の家庭料理を作り、サーブしながら料理の説明もしてくれるという、その国の味も文化も堪能できるシステムだ。この日、調理を担当していたのは、ベネズエラ出身のセシリアさん。彼女は日本人と結婚し、諫早（いさはや）に暮らす主婦でもある。ひと月に三、四回の当番のたび、買い出しに行き、メニューのレパートリーを研究するのは、家庭を持つ身では容易なことではないはず。それでも地球館に来るのが楽しみだと彼女は言う。

「知らなかった国の人と出会えるし、自分の国のことを知ってもらえる。ここでは外国人だからと特別に見られることなく、普通の人付き合いができるからね」

英会話ができないのは悔しい それが交流へとつながった

牛嶋さんが国際交流塾を立ち上げたのは、平成四年のことだ。異国情緒あふれる街のこと、興味のおもむくまま自然発生的に生まれたと思いきや、「それまで国際交流にはまるで興味はなかった」。実はことの発端は、英語だった。ご両親の介護のため、高校教諭の職を辞し長崎に帰っていた当時、ふと、「英会話ができないのは悔しい」と思った。ここまでは、おそらく誰しも一度は考えること。しかし、そのアプローチが常套ではなかった。英会話学校に通うのではなく、地元の留学生を訪ね歩き、「日本人は英会話をできない人が多いが基礎知識はあるので、ネイティブでなくてもしゃべる機会さえあればできるようになると思う。協力してくれませんか」と話を持ちかけたというのである。「既成の教室にピンとくるものがなくて」と牛嶋さんはさらりと言うが、だからといって一から作ってしまおうという発想には驚く。しかしそこからの過程にもまた驚かされる。

英会話教室を発足すると、まず、牛嶋さんは教室の機関誌を制作する。それが国際親善協会の会長の目に留まり、声を掛けられ協会の会報誌作りを手伝うようになる。するとその活動が「長崎伝習所」につながる。伝習所というのは、まちづくりや国際交流などをテーマにした活動団体を市民から公募し、資金援助するという市が行っている事業。以前から、土地柄もあって国際交流関係の塾があったが、いずれも長続きせず解散してしまう。そんなとき、牛嶋さんに白羽の矢が立ったのだ。

「すべて『たまたま』で、それがつながっていったような形ですね」

国際交流塾は盛況を博し、活動も目覚ましく、長崎伝習所としては異例の五年の間、長崎伝習所「国際交流塾」として活動を継続、一〇年前の平成九年に市民団体・長崎「国際交流塾」として独立した。

国籍を問わず、趣味を共有し 親睦を深めていく

では、その活動を長きにわたり支えてきたものはなんだったのか。要因はさまざまだが、根幹にあるのは、人と人との付き合いに立ち戻って国際交流をとらえた点にあったのではないか。

地球館内の厨房で調理をするセシリアさん（上）。左端の高梨真理子さんが地球館の運営を任されている（上中）。本日のメニューは豚肉とトマトを煮込んだコッチーノ・エン・サルサとごはん（アロス）、エン・サラダ、そしてごはんを使ったデザートアロス・コン・レーチェ（上左）。踊り場下の空間では世界各国の雑貨を販売している（左）。

「国際交流といっても、日本人が外国人に『いつ日本に来られたんですか』『何のお勉強ですか』というようなことを聞いて終わりでしょう。外国の方はどこへ行っても同じようなことを聞かれるわけで、うんざりしますよね。うちの基本は交流活動の日常化なんですよ。共通目的を持ってやらないと絶対続かないというのははじめから思っていたので」

塾の活動は多彩である。バドミントン、山登り、チェス、着付けなど、興味ある活動に自由に人が集まるようになっている。活動日や内容は、各班のリーダーに任せ、国籍を問わず共通の趣味でつながれるようになっているのだ。それでもサークル的な遊びムードに終始しているのでは、とうがった見方をするのは大間違いである。例えば、週に一度行われるバドミントン班の活動を覗けば、レベルの高いラリーが展開され、ほとんど部活の様相である。参加した誰もが等しくコートには入れるよう工夫され、みなその規律に従ってキビキビ動いている。それでもコートに入る順番を待っている間など、塾生の間で会話が途切れることなく、自然な形で交流が行われるのだ。班長を務める森脇茂さんは言う。

「体育館の予約をとるのはもちろん、皆さんはシューズとウエアだけ用意していただければということで、道具も用意してお誘いしているんですよ。最初に日本に来られた人は、場所も分からないと思うので、僕らが迎えに行ったりもします」

班長の細やかなフォローの甲斐あって、活動人数は一五年間減ることがない。年に一度は、長崎大学留学生協会とバドミントン大会を開き、今年は国際大会まで開いた。「長崎はバドミントン発祥の地ですから」と言う森脇さんも、実は誘われて「たまたま」塾に入り、「中学の頃やっていたので」バドミントン班をはじめた。これだけしっかりした団体なのに、「国際交流」主眼で入塾した人が思いのほか少ないのが面白い。その「たまたま」入った人たちの、目を見張るような活躍もまた、興味深い。つまり、「国際交流」に対する凝り固まった概念を取っ払って、柔軟に外国人と接してきた姿勢が活動の大きな原動力になっているのだ。

山登りの班長であるスリランカ出身のヘーラットさんは、塾の班活動をこう特徴づける。

「みんな自発的なので班長といっても気が楽です。連絡だけちゃんとすれば、大丈夫。でも例えば東京だったら、ここまで分け隔てなく気軽な活動はできなかったかもしれないけどね」

世界のカレンダーを集めた「カレンダー展」を運営するヘーラットさん。登山班の班長でもある（上）。マレーシアの留学生はみなバトミントン上級者。かなり本格的（下）。

一〇種ある班活動は、年間、延べ回数にすると二〇〇回程度行われている。また、一月の七高山巡り、五月の稲佐山へのハイキング、六月のバドミントン大会、九月の居留地まつりなど、塾を挙げての恒例行事も盛んだ。

国際交流とは自分たちと異なる価値があると知ること

塾では他にも画期的な活動を多々行っている。日本人を外国人留学生が受け入れる「逆ホームビジット」型国際交流を実施し、海外支援も行っている国際交流塾にとっては、災害支援も、「ニュースで聞いたどこか遠くの出来事」というスタンスではない。「帰国した仲間たちの出来事」で、至極身近なものである。彼らと連絡をとり、窮状を聞き、チャリティーなどで集めた募金は塾生に託す。さらにその過程やお金の使途まで明確に

明治31年頃に撮られた南山手から東山手を望んだ風景（写真提供：長崎歴史文化博物館）。長崎は写真発祥の地でもある（上）。現在の東山手の景観（下）。

するという首尾一貫した支援を行っている。これまでスマトラ沖大地震による津波被害の支援やグアテマラの無医村へのクリニック建設など、多くの援助を行ってきた。しかしそこで、「何か与えてやらねば」というだけで、相手から学ぼうとしないのは、結局差別に等しいのだと牛嶋さんは言う。例えば、留学生などに対しても、こちらが「してあげる」という姿勢である限り、いかにその外国人が能力を持っていても、それを発揮できる場を得られない。彼らのプライドは押し込められてしまう。

「真の国際交流は、そうした表面的なことではありません。まず相手の国籍を外して付き合うこと。要は自分たちが持っている価値観とは異なる価値観が存在する、ということを知ることではないでしょうか」。

相互理解というのは、お互いの個性を殺し、同化していくことではないのだ。先のセシリアさんは、「多くの国の人々と交流することはできるけれど自分が日本人になることはできない」と言う。

「自分の国とは違う日本の習慣の勉強もします。でも時々は理解できないこともあって、私はそこまでしかできないと感じることもあります。でも交流は、その国に合わせて自分を変えることではないでしょ」

国際交流塾には「異文化を理解する」「自分の国の文化を知る」「自分自身を知る」といった設立趣意がある。これらはいずれも、設立時に掲げられたわけではない。活動を通して気付いていったことだと、牛嶋さんは言う。

「国際交流の果てにアイデンティティーがなくなっていくというのは違うように思います。もともと文化には優劣がないんです。例えば、機械文明のようなものには進化の優劣があるでしょう。でも、文化というのはその土地にはぐくまれたものですから、中南米だろうが東南アジアだろうが欧米だろうが、優劣はありません。日本は日本なりの気候、風土にはぐくまれた文化というものがあるわけだから、それはぜひ残っていってほしいと思っています」

牛嶋さんの深い言葉に接すると、偶然の連鎖だけでここまで本質的な活動にたどり着けるものだろうか、と不思議になる。そういえば、塾を立ち上げたときの心情を牛嶋さんはこんなふうに述懐した。

「食べるには困らなかったものの、当時はやるべきことがなかった。そうすると心が死んでいくんです。何かしないといけない、何か行動を起こさないとダメになるというのが、非常にありました」

停滞した日々は、実は、物事の深部を見出す好機でもある。そしてそこから人々を救い出すきっかけとなるのは、いつの時代も「文化」だったのではないか。映画であり、音楽であり、言葉であり。牛嶋さんのかつての日々は今、国際交流という文化的で人間的な営みへと転化した。人と人との自然な関わりを見つめ、柔軟にそれを広め、掘り下げていったのだ。

かつて異人に接した長崎の人々は、はじめこそ驚き、恐れはしたろうが、国籍や差別といった垣根を越えて、多くの文明や技術を巧みに取り入れていった。習慣や宗教まで、積極的に理解した。長崎の独特な景観がとみに美しいのは、多彩な文化を許容した歴史の跡が見えるからである。そして異文化をただまねるだけでなく、それを咀嚼（そしゃく）した上で他にはない自己を確立しているからだ。

「私たちは、違うからこそ面白いんです。平和であれば、違いというのは豊かさなんですよ。しかしそうでなければ、違いは紛争の原因ともなる。だから、平和を保てる社会、いわゆる多文化共生社会を築けるかどうか、ということではないでしょうか」

そう、すべての文化は、平和の上に成り立っているのだ。

長崎を代表する観光地、南山手の旧グラバー住宅。